

草野勝彦・西 洋子・長曾我部博・  
岩岡研典 共著

## インクルーシブ体育の創造

—「共に生きる」授業構成の考え方と実践—

中田 英雄 (なかた ひでお)

＜筑波大学大学院人間総合科学研究科教育開発国際協力研究センター＞

### インクルーシブ体育 の創造



創

## 書 評

平成 19 年 4 月から特別支援教育が学校教育法に位置づけられ、個々の幼児・児童・生徒の教育的ニーズを重視した取り組みや指導が、特別支援学校および通常の学校で行なわれるようになった。このような社会の動きにあわせるように本書が企画・出版されたのはタイムリーであった。

さて、本書では障害のある子とながら一緒に体育に参加することの意義と方法が具体的に述べられ、インクルージョンの理念が体育という授業を通して示されている。かつて、障害のある子が障害のない子と一緒に体育授業に参加することはきわめて困難であったし、参加すら認められなかった時代があった。なにが障害のある子を排除してきたのか、なにが障害のある子の参加を受容させるのか、本書はこのような問いかけに対する答えを随所に示している。1 章の「インクルーシブ体育とは何か」をじっくり読むと、その答えが見つかる。いままで抱いていたもやもやとしたものが整理され、安心してスタートラインに立てるようになる。能力差を理解し、特別な教育的ニーズを把握し、障害の理解から個性の理解へと広がり、共感と共振の感覚を獲得するまでの一連の流れは、体育教師ばかりでなく、特別支援教育に携わるすべての教師に必要

不可欠な理念である。ここにはインクルーシブ体育に取り組む教師や指導者の出発点が具体的に述べられている。本書の次の特徴は、インクルーシブ体育の授業を重視している点である。2 章「インクルーシブ体育の基本課題」では文部科学省の学習指導要領の理念がインクルーシブ体育の理念とオーバーラップし、すべての体育に適用できることが指摘されている。インクルーシブ体育がこれまで養護学校等で行なわれてきたアダプテッド体育の成果を活用しながら、新しい体育授業を創り出す場であることが丁寧に述べてある。インクルーシブ体育授業はチャレンジにあふれ、既存の体育授業をベースにしつつ、新しい活動を工夫していくことにある。「創造の体育」と呼ばれる所以である。この言葉は、特別支援教育の本質の一端をいみじくもとらえている。インクルーシブ体育授業を行なう教師は、意識改革を迫られる。体育教師は、①不安や戸惑いを感じる段階、②「ズレ」や「まさつ」を感じる段階を経て、③創造的挑戦に意欲的になる段階、④共感、共振を経験する段階に行き着き、最終的に⑤「共に生きる」を自然に実感する段階に到達するといふ。3 章では「インクルーシブ体育における意識変容のプロセス」が述べてある。子どもと協同しながら教

師の意識が次第に変容していく過程は、教師が子どもから何かを学び取っている過程であり、教師の内面に変化が生じていることでもある。最終段階に到達した教師は、一人ひとりの子どもの特性を加味しながら、現実により近い形でインクルーシブ体育の授業をイメージすることができるようになるという。4 章の「インクルーシブ体育の創造と展開」では、表現リズム遊び・表現運動、器械運動、跳び箱運動、陸上運動の実践例が紹介されている。ゲームを取り入れたり、勝ち負けにこだわらないようにしたり、協力の仕方や他者の理解に重きを置いたりして、さまざまな工夫をこらした授業が紹介されている。最終章では、インクルーシブな体育やスポーツを地域社会で行ないながらそこに根を下ろしているバリアを取り除き、インクルーシブな地域社会づくりを目指す実践例が紹介されている。

インクルーシブ体育は教師の質、学校の質、地域社会の質を変え得る可能性を秘めている。体育教師はもとより、特別支援教育に携わるすべての教師が座右に置くべき本である。

(B5 判/126 頁/定価 2,520 円/市村出版)